

タイトル 「感覚の同定などどうでもいい」という話の背景

副題 『哲学探究』第 270 節の一解釈

氏名(所属) 橋本 正吾(関西学院大学)

ルードヴィヒ・ウィットゲンシュタインの後期哲学の主著である『哲学探究』は日常言語の観点から諸々の哲学的テーマを分析している。なかでもその第 243 節から第 315 節までの一連の節は「私的言語」に関わるとされ、そのテーマは一般的に「私的言語論」と表現される。この「私的言語」として扱われているのは、その「言語に属する語は、話者のみが知ることのできるものを、すなわち話者の直接的で私的な感覚を指示する(sich beziehen)言語であり、「他人には[...]理解できない」 (§ 243) 言語である。そして、第 243-315 節では、このような性質を持つ「私的言語」の是非について、さまざまな角度から考察がなされる。

さて、第 258 節、第 260-261 節、第 270 節では、個人にのみアクセスできる私的な感覚について日記をつけるという想定がなされる。そこでは、繰り返し感じるある感覚(例えば痛み)に「E」という記号を結びつけ、それを感じた日に「E」を日記に記入していく。とりわけ第 270 節では、「「E」という記号を私の日記に記入することのある使い方」として、次のような経験が説明される。

ある決まった感覚を感じる時血压計を見ると、いつも血压が上がっている。こうして私は器具を使わずに自分の血压が上がったと言えるようになる。これは役に立つ結果だ。[§ 270]

「E」の記号の説明に当の記号が一切登場しないのはさておき、ある感覚を感じた時に血压の上昇を言い当てられるようになるのならば、血压を測るときにはや血压計を必要としなくなるので、これは確かに役立つ結果だと言えるだろう。この経験に対して、ウィットゲンシュタインは以下のように続ける。

さてこの例で、その感覚を私が正しく再認したのか、そうでないのか、はまったく無関係であるように思われる。感覚を同定する(identifizieren)際に私がいつも間違っていたとしても、何の違っても生じないのだ。そしてすでにこのことが、この間違いの想定が見かけのものに過ぎなかったことを示している。[ibid.]

なるほど、だがこのウィットゲンシュタインの説明にどれほど納得できるだろうか。というのも、ある感覚が生じたからこそ「E」を日記に記入しているわけなのだから、その繰り返し感じる感覚を正しく再認できていなかったり、それをそれとして特定・同定するのにいつも失敗したりすれば、そもそも「E」という記号を正しく記入できないのではないのだろうか。おそらく、この反応が自然なものであり、それこそ私たちが持つ日常的な感覚だろう。

先行研究においても、同様の点が問題視されている。とりわけ野矢の指摘は説得力のあるものだと思う。

ここでは感覚と血压の上昇の相関関係が言われている。だとすれば、当の感覚を正しく同定しなければ血压の予測にも失敗すると思われる。だが、ウィットゲンシュタインはここでは感覚の同定などどうでもいいと論じる。少なくとも私はこの議論に多少の当惑を禁じえないが、それは私が「言語以前に感覚を同

定する」という考えから抜け出せないでいるからだろう。あるタイプの感覚が同定されていないのであれば、何を「痛み」と呼んでいるのか分からないじゃないか。私はなおそんな思いから離れられないでいる。ウィットゲンシュタインは「つねにその同定をまちがえていたと仮定しても、何の違っても生じえない」と言う。[野矢[2022] p. 150]

ここで問いたくなるのは、この時点でウィットゲンシュタインは実は誤りを犯しているのかどうか、ではないだろうか。まとめると、第 270 節に対する疑問は以下のように表現できるだろう。第一に、繰り返し感じる感覚に関して「E」という記号を血压計と連動するような正確性でいつもきちんと日記に記入できているとすれば、それがまさにその感覚を「正しく再認し」、「同定」していることにはならないのか、という点。ここで当てずっぽうで常に「E」と記入し、その記入がたまたま血压計の数値と連動していた、という奇跡的なケースを考えてみよう。それでも、第二の問いとして、私的な感覚に対しての何かしらの「再認」や「同定」といった判断がなければ、「E」という記入がそもそもできないのではないだろうか。本当に当の感覚の「再認」や「同定」が「まったく無関係」で「感覚の同定などどうでもいい」と言えるのだろうか。

本発表では、上記の疑問点が正しいものであることを認めつつ、ウィットゲンシュタインの主張との間に内容的なズレがあることを指摘し、私的な感覚の同定が「まったく無関係」であるという発言の背景を浮き彫りにすることを狙いとする。その際、「私的言語論」における以下の特徴を確認し、その文脈に重点を置いた解釈の提示を試みたい: 1) 「私的言語」の一連の節では、「記録する(notieren)」、「話す(sprechen/reden) (§ 260)」という諸々の語が非常に限定的な意味で用いられており、「同定(identifizieren)」という語も同様であること; 2) 血压計の例での「役に立つ」という表現が持ちうる意味合い; 3) 私的な感覚を「何か(Etwas)」という物理的対象のように捉えることが「哲学をしている」ときにしていまいがちな言葉の使い方であるという点 (§§ 253 & 261); 4) 第 270 節で登場する機械の「つまみ」や第 271 節の「歯車」および第 270 節に関連するマニユスクリプトで述べられる「神の祈り/位置」の例(Wittgenstein, L. [2000], MS 165, pp. 299ff.)と私的な感覚との関係; 5) 「痛み」という言葉が何を意味する(bedeutend)のか (§ 271)のように、「私的言語論」で度々登場する „bezeichnen“, „bedeuten“, „beschreiben“ という用語が何を暗示しているのかという点。一次・二次文献の考察と照らし合わせながら、以上の点を明確化することで、第 270 節における「感覚の同定などどうでもいい」という趣旨の発言の背景および真意を探ることとする。

<本要旨の参考文献>

野矢茂樹 『ウィットゲンシュタイン『哲学探究』という戦い』、2022、岩波書店。

Wittgenstein, L. 1984, *Philosophische Untersuchungen*. In: *Werkausgabe*, Bd. 1, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, pp. 235–618. (邦訳:『哲学探究』鬼界彰夫訳、2020、講談社。本要旨の訳文は当訳書に準じる。「第某節」と「§」の表記は『哲学探究』の該当節を指す。)

Wittgenstein, L. 2000, *Wittgenstein's Nachlass: The Bergen Electronic Edition*, Oxford: Oxford University Press.